

心臓財団 季報

No.173

● 財団法人日本心臓財団 ●

〒100-0005 東京都千代田区丸の内3-4-1 新国際ビル835区-A

○ Tel 03-3201-0810 ○ Fax 03-3213-3920 ○ e-mail:info@jhf.or.jp ○ http://www.jhf.or.jp/

November 10, 2003

平成15年度日本心臓財団研究奨励決定

本年度の研究奨励事業は、第29回日本心臓財団研究奨励と今年新たに設けられた日本心臓財団若年研究者研究奨励(藤基金)の第1回に全国から91名の応募があり、笠貫宏東京女子医科大学教授を委員長とする選考委員会が9月19日に開かれ、下記に掲載の12名が選考されました。

第29回日本心臓財団研究奨励は40歳未満の少壮研究者を、第1回日本心臓財団若年研究者研究奨励(藤基金)は30歳未満の将来性のある若手研究者を対象に心臓血管病の成因、治療、予防等循環器の研究領域広い範囲から募集するものです。

奨励金はそれぞれ100万円で、贈呈式は来る12月1日に東京・銀行倶楽部において行われます。

選考委員長	笠貫 宏	東京女子医科大学附属日本心臓血管研究所循環器内科学教授
選考委員	井上 博 今泉 勉	富山医科薬科大学医学部内科学第2教授 久留米大学医学部内科学第3教授
(五十音順 敬称略)	木村 彰方	東京医科歯科大学難治疾患研究所分子病態教授
	倉智 嘉久	大阪大学大学院医学系研究科情報薬理学教授
	児玉 和紀	財団法人放射線影響研究所疫学部長
	高野 照夫	日本医科大学内科学第1教授
	田林 暁一	東北大学大学院医学系研究科心臓血管外科学教授
	中澤 博江	東海大学医学部生体構造機能系生理学教授
	横山 光宏	神戸大学大学院医学系研究科循環呼吸器病態学教授

第29回日本心臓財団研究奨励 対象研究者

(五十音順・敬称略・奨励金額はそれぞれ100万円)

番号	氏名	所属	研究課題
1	大塚 文男 (35歳)	岡山大学医学部附属病院 第三内科 助手	骨形成蛋白(BMP)システムの異常による 原発性肺高血圧症の発症機序の研究
2	小室竜太郎 (38歳)	大阪大学大学院医学系研究科 分子制御内科学 研究生	血管内皮barrier機能を制御する shearstress関連新規RhoGTPaseの標的分子の同定
3	副島 弘文 (38歳)	熊本大学 保健管理センター 助手	冠動脈プラークにおける免疫学的機序の研究
4	武田 壮一 (35歳)	国立循環器病センター研究所 心臓生理部 室長	心筋トロポニンのリン酸化とカルシウム 調節機構の構造的な研究と創薬への応用
5	西 英一郎 (39歳)	京都大学大学院医学研究科 先端領域融合医学研究機構 助教授	新規HB-EGF結合蛋白Nardilysinの心血管 疾患における病理学的意義の検討
6	萩沢 康介 (34歳)	防衛医科大学校 医用電子工学講座 研究科学生	血栓標的性ナノパーティクルを利用した 超音波破砕による非侵襲的血栓溶解療法の開発
7	南野 徹 (38歳)	千葉大学大学院医学研究院 循環病態医科学 助手	AKTによる血管細胞老化の誘導メカニズムと その病態生理学的意義の検討
8	矢作 直也 (33歳)	東京大学医学部附属病院 糖尿病代謝内科 医員	肥満動物脂肪細胞における中性脂肪合成系 遺伝子発現の負のフィードバック機構の研究
9	山下 俊英 (38歳)	大阪大学大学院医学系研究科 未来医療開発専攻 ポストゲノム疾患解析学講座 助教授	P75特異的結合ペプチドによる中枢神経軸索再生
10	山本 健 (39歳)	山口大学医学部 器官制御医科学講座 循環病態内科学 助手	リアノジン受容体の安定化による心不全抵抗性心筋細胞作成の試み

第1回日本心臓財団若年研究者研究奨励(藤基金) 対象研究者

(五十音順・敬称略・奨励金額はそれぞれ100万円)

番号	氏名	所属	研究課題
1	井澤 有紀 (23歳)	徳島大学医学部 病態情報医学講座 情報伝達薬理学分野 M.D.Ph.Dコース 1年次 大学院生	糖尿病性微小血管障害におけるBMK1の 生理的意義の解明と新しい治療法の開発
2	松浦 勝久 (28歳)	千葉大学大学院医学研究院 循環病態医科学 研究生	成体マウス心筋幹細胞の単離、 同定と心筋への分化過程の解明

第3回日本心臓財団 Scholarship 一心不全CRT海外研修— 助成対象者決定 10名を選考

当財団では日本メドトロニック株式会社の協力を得て、今回は心臓病治療において心不全CRT(Cardiac Resynchronization Therapy)の研究者に対し、この分野で本邦より進んでいる研究機関Emory University(米国・ジョージア)にて1週間の短期海外研修助成を実施します。対象は、心臓血管病の臨床電気生理学に携わり、ICD認定施設関連に従事する35歳以上の研究者です。

今回は15名より応募があり、去る9月8日、東京国際フォーラムにて笠貫宏東京女子医科大学教授を委員長とする選考委員会が開催され、下記の10名が選考されました。

助成金はそれぞれ80万円です。

選考委員長	笠貫 宏	東京女子医科大学附属日本心臓血管研究所 循環器内科学教授
選考委員	相澤 義房	新潟大学医歯学総合研究科器官制御医学教授
(五十音順 敬称略)	奥村 謙	弘前大学医学部第二内科教授
	鎌倉 史郎	国立循環器病センター第一生理機能検査室医長
	田中 茂夫	狭山中央病院院長

助成対象研究者

(五十音順・敬称略)

番号	氏名	所属・職名
1	阿部 芳久 (45歳)	秋田県成人病医療センター 循環器部長
2	家坂 義人 (55歳)	土浦協同病院循環器センター 内科部長
3	鵜野起久也 (44歳)	札幌医科大学医学部 内科学第二講座講師
4	岡崎 修 (47歳)	国立国際医療センター 腎臓循環器病棟医長
5	小川 正浩 (38歳)	福岡大学病院循環器科助手
6	奥山 裕司 (41歳)	大阪警察病院心臓センター 内科医長
7	清水 昭彦 (48歳)	山口大学医学部保健学科教授
8	春名 徹也 (38歳)	北野病院循環器内科副部長
9	森山 泰 (38歳)	国家公務員共済組合連合会 熊本中央病院循環器科医師
10	吉田 明弘 (40歳)	神戸大学大学院医学系研究科 循環呼吸器病態学講座助手

健康していますか？あなたのハート

8月10日ハートの日・健康フェア

- 東京八重洲地下街センタースポット
- 「健康ハート旬間2003 in 鹿児島」報告
- 「第4回ハートの日 in 豊橋」報告

■ハートの日健康フェア —東京版—

杉本恒明

平成15年8月10日(日)、日本心臓財団ハートの日健康フェア—東京版—は東京駅八重洲地下街のセンタースポットで行われた。例年は巣鴨のとげ抜き地蔵の境内で行われていたのであるが、今回は日曜とあって、場所を手配できなかったのである。広く大きなスペースを提供してもらい、血圧、体脂肪測定、指尖容積脈波、脈波伝達速度、健康相談などにこれまで以上のブースを確保できた。担当医師は、細田瑳一、上松瀬勝男、後藤淳郎、山田薫、細田徹、それに私、杉本恒明の6名、例年のごとく、フクダ電子からの大勢の皆さん、それにラジオ短波、トアエイヨー、協和企画、文栄社の方々、そして、いうまでもなく、心臓財団事務局のオールスター各位の参加があった。

朝のうちは通りの人出はまばらだったが、昼前頃から混雑気味となった。結果的には300人足らずの受診者があったようである。事例を少し拾ってみる。

- ・77才、男性。心房細動があるようであった。ジゴキシン、ラシックスを服用中。夫人を62歳、直腸ガンで亡くしたという。毎年、海外旅行をしており、中国へも講師として定期的に出張している。血管年齢が66歳とあって、また元気が出たと喜んでた。
- ・26歳、女性。検査は受けず、相談だけをとやってきた。10年来の摂食障害があり、現在は過食に悩んでいるという。過食すると激しく吐き、不整脈が出て、立てなくなる。低カリウム血症といわれている。この間の因果関係を説明する。よくわかっているようであったが、いつもいわれていることと同じであったので、納得できたという風情であった。
- ・58歳、女性。血管年齢は脈波伝達速度からは年齢相当だったが、指尖容積脈波では80歳以上という結果をもってやってきた。苦痛となっているのは20年来の期外収縮性不整脈であるという。期外収縮は健康な人にしばしばみられ、一旦気にし始めると際限なく気になるものであると型のお話をするのであるが、自分は神経質ではないと主張する。指尖容積脈波でみる指先の動脈の硬さが非常に硬いということは、自分が意識しない神経の過敏状態があることを意味すると説明すると、なるほど大変に納得された。



回収された121部のアンケートからは受診された皆さんの感謝が記され、喜ばれた様子が窺えた。事前に広告、宣伝をしてほしい、今後ともこうした運動を全国的に展開してほしい、埼玉でも、あるいは新宿でもやってほしいといった要望が沢山あった。「ドキドキして受診し、ウキウキして帰る」と書かれてあったり、偶然にこういう機会に出くわし、「タカラクジに当たったようだ」と喜んで帰っていく方があった。

台風一過の翌日、快晴の日曜日、これまでのとげ抜き地蔵境内での健康フェアとはかなり違った雰囲気での検診を楽しんだ。当日、たまたま通りすがりの限られた方々についてではあったが、それなりのお役には立ち、財団の啓発活動を知っていただき、そして、何よりも大事なことは私達自身が勢ぞろいして、私達を必要とする人達との触れ合いの機会を得たという貴重な体験の一日であった。お休みの大切な一日を私どもに協力して下さった皆さんには心からお礼申し上げる。

■「健康ハート旬間 2003 in 鹿児島」報告
特定非営利活動法人 健康ハート21

今年で18回目を迎えた「健康ハート旬間2003 in 鹿児島」も8月10日の“ヘルシーディナーの夕べ”をもって無事にすべての行事を終えました。

「8月10日は健康ハートの日」を広くアピールするために日本心臓財団が今年8月10日を“JAPAN HEART DAY”としたことに呼応して、鹿児島においても7月31日の南日本新聞での広告で“JAPAN HEART DAY”を大きく打ち出し、各行事への参加を呼びかけました。

8月3日山形屋文化ホールで開催の“あなたの心臓総点検”には、600名近くの県民が健診に訪れ、生活習慣病のチェックおよび健康づくり相談に参加しました。総コレステロールなどの血液検査の実施数は過去最高の460件にのぼり、脈波・心機図の装置を用いた血管年齢検査を約200名、骨密度検査を400名、栄養相談が200名など、これまでの最高を記録しました。120名のスタッフが昼食もそこそこにフル回転で頑張りました。心臓財団のパンフレットもハートニュースもすべて出つくしました。医師相談、栄養相談は5時の締め

切り時間を延長して対応に追われました。今年は、出水市や国分市からのわざわざの参加もみられ、生活習慣病に対する県民の意識の高まりが感じられました。

8月10日は、恒例の“ヘルシーディナーの夕べ”が鹿児島東急ホテルで開催されました。160名の参加が得られ、立川俱子鹿児島県栄養士会長と下前吉弘シェフの解説で、フランス料理のフルコースを食べながら、ヘルシーメニューの学習や鹿児島フィルハーモニーアンサンブルの演奏を楽しみました。今年のメニューの目玉は、海草から作られた究極の繊維食品「海水晶」でした。さっぱりして歯ごたえがあり、サラダや刺身のつまなどによさそうと好評でした。両行事とも来年も引き続き開催を望む声が寄せられ、私たちの活動の意義を再認識させられました。

■第4回ハートの日in豊橋
ホテル日航豊橋 ホリディ・ホール

- ・肥満度の測定-1
- ・標準体重・体格指数の測定
- ・肥満度の測定-2
- ・体脂肪率の測定
- ・血圧測定
- ・血液検査
- ・心電図検査
- ・救急隊による救急対処相談室
- ・救急蘇生法の講習会、他
- ・循環器専門医師による健康相談
- ・管理栄養士による食事栄養相談

講演

- 「心臓病治療最前線」
豊橋ハートセンター 鈴木孝彦先生
- 「心臓病の外科治療」
豊橋ハートセンター 大川育秀先生
- 「不整脈を見る」
豊橋ハートセンター 外山淳治先生
- 「家庭や職場での救急蘇生法」
豊橋市消防本部
- 「心臓発作と救急ヘリ出動状況」
中日本航空株式会社
- ビデオの放映資料の配布、他
豊橋市少年少女合唱団によるコンサート

1200名の希望者の列が午前7時からでき、用意した1500個のおにぎりが、瞬く間に無くなる盛況ぶりでした。先生を始めみなさまのご協力に感謝申し上げます。

●当財団では8月10日が810(ハート)と読み取れることから、1985年にこの日を「健康ハートの日」と定め、一般の方に循環器疾病に関する正しい知識の普及啓発を進めてまいりました。世界心臓連合は2000年に9月の最後の日曜日を「世界ハートの日」と決めました。

世界ハートの日

世界心臓連合事業は世界における心臓病と脳卒中の予防を推進する

世界心臓連合World Heart Federation, WHFは1946年に設置された国際心臓学会International Society of Cardiologyに始まる。1978年、国際心臓学会と国際心臓連盟International Cardiology Federationが統合されて国際心臓連合International Society and Federation of Cardiology, ISFCとなった。

□世界心臓連合 —その背景—

1998年、リオデジャネイロでの世界心臓学会のおり、国際心臓連合は世界心臓連合となった。これは単に名称の変更にとどまるものではなく、2001年に始まるわれわれの使命、「世界心臓連合は、心臓病と脳卒中の予防と管理を通して、とりわけ低収入の国々の人々が長く、よりよい生活を享受できるように援助する」という事業達成に向けての第一歩を意味するものであった。

この新しい目的は世界心臓連合をして世界的な広がりをもつ指導的な国際的非政府組織として心臓血管疾患制圧に乗り出させるものであった。世界心臓連合の事業は世界保健機構の事業と密接に関連している。世界心臓連合事業の中心となるのは、医師、ヘルスワーカー、患者、一般市民がもつ関心に科学的かつ実務的な勧告を与えることである。学会や財団から構成される世界心臓連合はこの目的のためには恵まれた立場にある。世界心臓連合は90の心臓学関係学会、4大陸の学会連合、54の心臓財団、4つの大陸心臓ネットワークを構成組織とする。財団は慈善団体ないしは患者あるいは一般市民を代表する個人の集まりである。援助あるいは予防計画については行政機関ばかりでなく、患者、一般市民からの支援が必要であるということは世界的に認められつつある。一般市民を納得させ得ない予防計画は失敗する。世界心臓連合はまた、援助、教育、研修、研究の推進組織でもある。科学諮問委員会は、例えば、国際間の学会活動を心臓血管疾患予防活動に向けて統合するものである。これは、高血圧、動脈硬化症、基礎科学、薬理学、小児科学などの分野で行われている。疫学、リウマチ熱、臨床心臓病学などに関する委員会も設けられている。

□世界ハートの日 —その起源—

世界ハートの日は世界心臓連合が主導するもっとも成功した行事である。これは1997年から1999年にかけての世界心臓連合ルナ会長の構想によって誕生した。

世界保健機構の世界保健報告2002は開発途上国における心臓血管疾患に関連する6つの危険因子を挙げた。高血圧、高コレステロール血症、喫煙、飲酒、果物・野菜不足、肥満である。

しかしながら、心臓血管疾患は開発途上国の健康政策の対象とはなり得ず、国際機関の多くは感染性疾患に関心をもちつづけている。開発途上国の健康政策を非感染性疾患、すなわち、心臓疾患、脳卒中、癌の予防へとひろげるべきときである。心臓血管疾患の予防のための投資は発展国においては心臓血管疾患死と罹病率を減少させることで十分に償われるものであり、開発途上国においても同様にいえることである。

この意味において、世界ハートの日はよい機会である。終日を心臓血管疾患の予防活動に費やすことは一般市民、政策担当者、健康事業従事者に対して情報を提供し、意識を深め、支援する上で、有意義なことである。

□世界ハートの日 —その発足—

世界ハートの日は財団、学会の各位と協議の上で、1998年に発足した。この日は毎年9月の最終日曜日と決められた。公式的には2000年の発足となっている。1999年にはキャンペーンの準備が進められ、世界保健機構、国際連合の教育・科学・文化機構(ユネスコ)の後援が得られることになった。1年目の標語は「拍動させよ」であり、心臓血管疾患予防のための身体活動の重要性が強調された。

2000年9月の最終日曜日はシドニーのオリンピックのときであった。このため、世界心臓連合はスペインのソフィア女王、国際オリンピック委員会のサマランチ委員長からの支援を得て、世界ハートの日のキャンペーンを開始することができた。バルセロナはソプラノ歌手カバイユとフラメンコ舞踊家コルテスの歌と踊りをもってこの一日を飾ってくれた。これについての報道関係の反応は迅速、かつ大きいものであった。

□世界ハートの日 —その影響—

2001年と2002年のテーマは「生命のためのハート」として心臓血管疾患の予防ばかりでなく、すべての年齢層の、あらゆる場合における健康推進に重点をおいた。2003年のテーマは「女性と心臓病」であり、2004年のそれは「若さを」である。

世界ハートの日の活動は表にみるように、ここ3年の間に急速に成長した。2002年に事業へ参加したのはアジア太平洋地域では18カ国、ヨーロッパで37カ国、アメリカで22カ国、アフリカで11カ国、中東では2カ国であった。

世界ハートの日には各国において、さまざまな行事が学会や財団との密接な協力の下で行われている。内容的にはランニング、スポーツ、演劇、大道での催し、ダンス、サイクリングなどが公共の広場や学校、病院などで行われている。

世界心臓連合は各国の事情に応じた活動を可能とするために、さまざまな情報を提供している。世界ハートの日の冊子、ポスター、それらのCD-ROMなどを用意している。世界心臓連合の役員たちの講演のビデオ記録などもあり、世界ハートの日のウェブ・サイトでみることができる (<http://www.worldheartday.com>)。サイトには2002年には100万人以上の訪問者があり、前年度を30%上回るものであった。

各国政府は国民に心臓病と脳卒中の危険因子に対する認識を深めさせるべく努力しているが、経費に比して効果は乏しい、しかしながら、世界ハートの日は少ない経費で一層大きい効果を狙うことができるものである。世界では死亡の3分の一が心臓血管疾患であるのに、開発途上国ではこれが80%にも及ぶと知ることは大きな驚きといえよう。



□世界ハートの日 —その未来—

開発途上国においては感染性疾患と心臓血管疾患の二重の負荷がある。国の経済的な発展と文化、健康は緊密に絡み合っている。開発途上国における心臓血管疾患を健康政策の課題とさせるために、国際的な健康機関としての世界心臓連合の指導的立場は極めて大事である。

世界ハートの日は一般市民と行政の結合を計るものである。世界心臓連合は世界保健機構と協力して各国政府の取り組みを推進することとしている。

世界心臓連合は世界ハートの日を例年の行事としている。テーマは毎年、変わるであろう。世界心臓連合は各国の学会、財団の市民レベルの健康増進、疾病予防活動を支援する。これらの活動は継続されることが重要である。活動の焦点は動脈硬化性疾患からさらに予防し得る心疾患、例えば、シャガス病、リウマチ性心疾患などに広げることが可能である。世界ハートの日キャンペーンの経験はさらに広い意味の非感染性疾患や

慢性疾患の予防・管理へと応用されるであろう。

世界心臓連合の活動はこのような使命にもとづく。各国政府機関の健康政策に影響力を発揮しながら、人々の生涯を選択し、決定するのは結局は個々の人々自身であること、人々の生活習慣である、ということをわれわれは忘れてはならない。

	2000年	2001年	2002年
参加国数	63	88	90
参加機関	103	120	147
国際報道機関	1	4	6
報道機関	記録なし	5千万	5億
善意大使	なし	なし	ファットとロナルド
配布冊子	記録なし	1,129,350	記録なし
ターゲット人口	3,321,309,000	3,816,071,000	3,924,758,000
ウェブ数	300,000	450,000	1,000,000

表 世界ハートの日参加者の2000年から2002年にかけての増加

第4回 エコ・ウォークソン 2003 イン ジャパン



歩くことによってチャリティに参加できるというウォーキング運動のエコ・ウォークソンは、第1回が東京、2回、3回が横浜、そして第4回目を迎えた今回は、横浜に札幌、京都を加え3会場での開催となりました。

チャリティ金は、今年は当財団と日本ユニセフ協会に寄せられます。チャリティ方法は、参加費1人1,500円のうち1km歩くごとに100円、10km完歩すると1,000円が寄付されるものです。

◆札幌大会

まず、皮切りは9月14日(日)、札幌で行われました。天気予報では、台風14号、北海道に上陸か、といわれるなか、前日の13日の札幌は大雨のうえ風が激しく、大会は中止になるのではと思われる向きもありましたが、翌14日は朝のうち風は強いものの、雨はすっかり上がり、9時頃には日が射し始め、昼頃には台風一過、まさに秋晴れとなり歩いていると汗ばむほどになりました。

朝3時に帯広を車で出てこられた人、東京からこられた人など遠方からの参加者もありました。朝8時から受付を開始し、8時30分、君原健二日本ウォークソン協会会長の合図で随時スタートしました。

コースは大通公園をスタートし、公園のなかを歩いて、近代美術館を眺め、北海道神宮、円山公園、そして札幌資料館脇を通り、一旦大通公園に戻り、さらに狸小路商店街から二条市場を進み、テレビ塔を横に見て、サッポロファクトリーまで足を伸ばし、時計台から大通公園に戻る10kmのコースでした。



331名が完歩し、そのチャリティ金の目録が、東京からこられた方が代表して、当財団の北島顕評議員に手渡されました。これを受け、北島評議員より生活習慣病といわれる循環器病は予防が可能であるといったお話と謝辞が述べられました。また北島評議員が教授をされている北海道大学大学院医学研究科循環病態内科学講座より協力をいただき、事故に備えて、医師、看護師の方に救護班として歩行中待機していただきました。幸いなにごともありませんでした。

◆京都大会

9月28日(日)の京都・嵐山は、天も味方につけ、雲ひとつない晴天となりました。この日は9月の最後の日曜日であり、これはWorld Heart Federation(世界心臓連合)が定めた世界ハートの日でもありました。

景勝地嵐山・中ノ島公園を出発し、渡月橋を渡って歩き始めると、すぐにさすが京都と感じさせられました。どこを歩いても手入れが行き届いているということです。住宅地を抜け、大沢池から嵯峨野田園地帯を行くと昔ながらの田んぼの風景と山並みが広がり郷愁を覚えてしまいます。愛宕神社にいたるあたりは古い街並みが残り、伝統的建造物群保存地区に指定されており、十分に目を楽しませてくれました。竹林のあいだを通り抜けるところも風情がありました。

倉敷から朝6時の新幹線に乗ってこられた75歳の男性と、先週は20km歩いたという長岡京市の60歳の女性から京都の解説を聞き、またおしゃべりをしながら3人での10kmの距離はとても短く感じられたウォーキングでした。



844名が完歩し、そのなかから宇治の方が代表して、当財団の篠山重威常任理事に目録が手渡されました。篠山常任理事より日本人全体の死亡者の3割がんと並んで心臓病と脳卒中をあわせた循環器病であり、この寄付金は循環器病の研究のために有効に使わせていただきますとのお礼と、歩くことは心臓病の予防につながるから大いに歩きましょうとの挨拶がありました。

救護班として、京都予防医学センター附属診療所副所長と看護師の方に参加していただき、札幌大会同様とくにけが人、病人は出ませんでした。

◆横浜大会

3回目となる横浜大会は10月19日(日)に行なわれました。これまでで最高の秋晴れとなり、半そででも大丈夫なくらいでした。

出発前の準備体操がとても楽しい。指導員の掛け声で「近くの人と5人以上握手～」「次は両手でやーやーやー」と、普段はとてもできないことが明るい雰囲気の中で背中を押され、つついできてしまいます。

「この横浜が3回目の方、手を上げて」「横浜の人～」「横浜以外の人～」「今回一番遠くから参加された方は北海道と鹿児島です。どこにいらっしゃいますか～?」「一番高齢の方は88歳です。80歳以上の方は全部で8名、どこですか～?」と司会者の声が。歩く前からわくわくしてきます。

横浜の街は、毎年新しい建物に会うことができます。元町の商店街でちょっと足を止め、港の見える丘公園、山下公園と、参加者のなかには寄り道を楽しむ人もいます。インドフェアーの屋台が立ち並び、公園前の海中では数十人のダイバー達が海底のゴミを集めている。横浜の美しさはこうして守られているのがわかります。海から採れた魚が水槽で泳いでいる、子ども達は動かない。

しばらくするとキラキラ光る建物が目にはいる。多分、朝日と夕日をモチーフにした芸術なのでしょう。途中のイベントが盛りだくさんで、前へ進むのが大変なくらい。毎年、少しずつコースが変わり、毎回歩いてもやっぱり楽しい。リピーターが多い理由がわかります。

全行程10km完歩したあと、会場で実行副委員長の阿久根英昭桜美林大学健康心理学科教授と学生による体力測定があり、今年も大人気。当財団のブースでは日本赤十字社神奈川県支部の協力を得て救急法体験コーナーが設けられ、子どもと大人への心肺蘇生法の訓練がありました。



今年も三浦、横須賀地区で活動している「和太穂」と「三崎高校太鼓部」による三浦太鼓が演奏されました。そのあと村山正博当財団評議員(横浜市スポーツ医科学センター長)の「ウォーキングと健康」と題する講演が行われました。参加者への告知が十分ではなく、また20分という短い時間のためもう少し聞きたい、もっとたくさんの人に聞かせてあげたかったと思いました。わかりやすい講演でした。次回はじっくり時間をとり、聴きたいものです。

4,205名が完歩し、参加者代表の家族から当財団とユニセフ協会を代表して当財団の杉本恒明副会長にチャリティ金の目録が渡されました。杉本副会長より寄付金の使途の説明と当財団の活動の紹介がありました。加えて一層の理解と支援の願いがありました。

救護班は横浜市スポーツ医科学センターにお願いし、医師と看護師の方に協力いただきました。参加者が多いこともあり手当てされた方は皆無というわけにはいきませんでした。靴ずれ程度で大した事故もなく終わることができました。



第8回日本心電学会学術奨励賞 決まる

第20回日本心電学会学術集会在9月8日・9日の両日、東京国際フォーラムで岸田浩日本医科大学附属多摩永山病院内科教授を会長に開催され、9日の総会において当財団が後援している第8回日本心電学会学術奨励賞の授賞式が行われました。

これは日本心電学会の会員で、心電学の進歩に寄与する顕著な研究を発表し、将来発展の期待される40歳未満の研究者に贈られるものです。

今回は三好俊一郎(慶應義塾大学医学部呼吸器内科)、森田宏(岡山大学大学院医歯学総合研究科循環器内科)が最優秀賞に、川瀬綾香(東邦大学医学部附属大橋病院循環器内科)、北村秀綱(神戸大学大学院医学系研究科循環呼吸器病態学)が優秀賞に選ばれました。

初めて海外留学する研究者に 1人300万円を10名に助成

協力：バイエル薬品(株)

初めての海外留学で、独創的な研究や萌芽的な研究を行う循環器領域の少壮研究者10人に1人当たり300万円の助成(総額3,000万円)を行っています。応募は、35歳未満の日本人で、すでに留学先の承諾を得ており、2004年度中に出発し、1年以上留学することなどが条件となっています。応募期間は11月30日までのため、希望者は至急当財団までお問い合わせ下さい。

心血管病の研究者に助成

テーマ「心血管細胞の分化・肥大・アポトーシス・再生—基礎から臨床まで—」

協力：ファイザー製薬(株)

心血管病の研究を行う40歳未満の研究者を対象に助成を行います。今回のテーマは「心血管細胞の分化・肥大・アポトーシス・再生—基礎から臨床まで—」で、ポスター展示発表により優秀課題12件を選考し、それぞれに50万円、さらに12件の中から翌年の研究発表会で最優秀課題4件に各200万円を助成します。原則として臨床系教室および病院に所属する人が対象です。

応募締切は12月15日です。

循環器の分子生物学的研究者に 1人100万円を10名に助成

協力：ゼリア新薬工業(株)

循環器領域で分子生物学的研究者の進歩に著しい貢献が期待される40歳以下の研究者10人に、1人当たり100万円の助成(総額1,000万円)を行っています。臨床教室およびそれに準ずる施設で研究をしている人が対象です。また過去にこの助成を受けられた方はご遠慮下さい。

応募の期間は本年の12月15日から来年2月15日です。

ご支援ありがとうございます

当財団へのご寄付

次の方からご寄付を頂戴しました。ここにご芳名を記して感謝の意を表します。(2003年8月～10月)

佐川 清様	茨城県常陸太田市	10,000円
飛田 實様	茨城県茨城郡	50,000円
葛城 徳彦様	茨城県ひたちなか市	15,000円
ヤヤオカカツコ様		5,000円
加藤 武様	神奈川県横須賀市	10,000円
國谷 尋様	茨城県笠間市	30,000円

当財団をご支援下さる方

本年度もご支援をいただいた方のご芳名を掲載します。

(敬称略：2003年7月30日～10月29日)

アランB.ブーツ	古賀 義則	中野 赳	宮崎 治浪
石川 雄一	小須賀健一	仁村 泰治	村田 光延
今泉 勉	島野 仁	沼野 藤夫	森下 竜一
上島 弘嗣	竹越 襄	林 直彦	森本ミヨ子
大島 文雄	竹下 彰	原田久美子	山口 巖
小野 幹彦	田中 繁道	平井 忠和	横出 正之
笠貫 宏	田中 弘允	藤田 正俊	渡辺 重行
梶谷 文彦	田中 元直	前田 肇	
木村 一雄	堤 健	松原 達昭	
甲谷 哲郎	長澤 一成	馬 淵 宏	

心臓財団からのお願い

～ご寄付ならびに賛助会ご加入～

当財団が循環器疾患の予防・制圧事業を展開するうえで、その多くは寄付金ならびに賛助会費により支えられております。あなたのおまわりの方にもぜひ呼びかけてください。

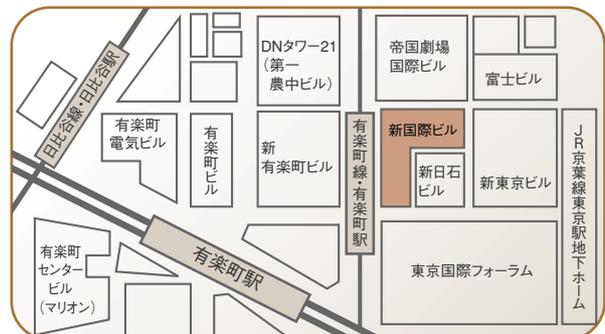
ご寄付はいくらでも受けさせていただいております。当財団は「特定公益増進法人」として認可を受けておりますので、税制上の優遇措置が講じられております。

賛助会は日本心臓財団の目的に賛同し、その働きを支援する方々、法人によって構成されています。賛助会費は、個人の場合、年額1万円、法人の場合は5万円で何口でも差し支えありません。

ご支援いただける場合は、下記の口座をご利用ください。

郵便振替口座 00140-3-173597

宛て先 財団法人日本心臓財団



●お近くにお越しの節はお立ち寄り下さい。●